

福音を生きる——伝道者の靈性

小 泉 健

1. 伝道者の務めの本質

伝道者論をどこから考えるか。——伝道者をめぐる今日の課題から考える、伝道者の自己理解と会衆の期待から考える等、いろいろな道があり得る。欧米においては、社会生活における牧師の位置の低下、役割の減少、權威の喪失に直面して、牧師の今日的な役割を新しく見出そうとしたり、信頼性を回復しようとする考察が多い。しかし、牧師を取り巻く状況は、日本の場合は欧米とは異なっているし、時代状況に応じた考察は、本来的な課題ではなく、第二、第三の課題にすぎないとも思われる。むしろ、伝道者であることの根本から考えたい。それが必要であり、また有益であると考ええる。

伝道者の務めはどこから来るのか。だれが人を伝道者として立てるのか。この問いには、二重の答えが必要である。第一に「神の召命から」。それと同時に「教会の委託によって」。すると、両者がどのように関係しているのかがさらに問題となるが、そのことは「3」、「4」で取り上げる。

①神のご意志から

伝道者の務めの根源にあるのは神のご意志である。使徒パウロは「神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく靈に仕える資格を与えてくださいました」（Ⅱコリント3：6）と言い、「神は、キリストを通してわたした

ちをご自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました」（同5：18）と言う。主語はいずれも「神」である。ここで「奉仕する任務」と訳された原語は「ディアコニア」で、伝道者の務めが「奉仕職」であることが示されている。キリストが「罪の贖い」（ヘブライ9：15）として死んでくださり、わたしたちに「神の子供たちの栄光に輝く自由」（ローマ8：21）が約束された。伝道者はこのことに奉仕する。伝道者は「キリストの存在、生涯、働きの継続」（アウグスト・フィルマール）において仕え、キリストのみわがが今ここでも起きることを追い求めるのである。

務めの内容は、「恵みの手段」を管理すること。すなわち、神の言葉を宣べ伝えることと、聖礼典を執行することである。これらの恵みの手段を通して、神はキリストにおける救いを世にもたらされる。

「このような信仰を得るために、神は福音と聖礼典を与える説教の職務を設定された。神は、これらのものを仲立ちとして聖霊を与えられる。聖霊は、神が欲する時と所において、福音を聞く人々の中に信仰を起こされる。」（「アウグスブルク信仰告白」第5条）

「…したがってわれわれの教師たちは、かぎの権能あるいは司教の権能は、福音によれば、福音を説教し、罪をゆるし、またとどめ、礼典を執行し分与すべく神より与えられた力であり命令であると教える。」（「同」第28条）

聖書にはまた、神が設定された職務があるとも言われている。「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師…」（Iコリント12：28）。「（キリストが）ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教師、ある人を牧者、教師とされた（教会に与えた）のです」（エフェソ4：11）。職制の伝統を形成した「監督、長老、執事」については、聖書に言及はあるものの、神的起源は言われておらず、むしろ上に挙げたように御言葉の務め、説教職について神的起源が言われていることにも注目すべきである。

②キリストの教会から

ローマ・カトリック教会は叙階の秘跡によって聖職者を立てる。聖職者はサクラメント的存在となり、信徒とは異なる身分を得る。叙階の秘跡の力によって、司祭は「キリストの代理者」として行動するのだと言われる。

宗教改革者たちはこの考えに反対した。ルターは、洗礼によってすべてのキリスト者が祭司へと任職されているのであって、必要な場合にはだれでも洗礼を受け、また罪の赦しを宣言できるとした。「洗礼によって新しく生まれ変わるものは、すでに司祭や司教や教皇になるように聖別されているということ、たとえばそのような職務を行うことがすべての人に適当でないにしても、そのことを誇り得るのである。」(ルター「キリスト者貴族」WA6, 408)

職務を認めることは、この「全信徒の祭司性」を否定するのではなく、むしろ具体化する。すべてのキリスト者が「選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民」(Iペトロ2:9)である。伝道者の務めは、すべてのキリスト者が持つ祭司性に基づいている。すべてのキリスト者が説教し、聖礼典を執行し、執り成しの祈りをし、教えを判断することができる。しかし、教会の秩序のために、祭司の務めの具体的な執行を伝道者に委託するのである。

その際、信徒は祭司の務めを伝道者に委託し、その後はかかわらないというのであれば、プロテスタント教会の牧師と信徒の関係は、ローマ・カトリック教会における司祭と信徒の関係と、実際には変わらないことになる。むしろ、全信徒が祭司性を持ち、その執行を牧師に委託しているという関係が、継続していくことになる。すなわち、一方で、牧師は教会での働きを独占するのではなく、信徒を形成し、信徒の働きを支え、信徒と牧師が教会を造り上げる(エフェソ4:12、13)。他方で、教会は牧師の説教と教えが福音にかなっているかどうかを見守る責任がある。職務の遂行が共同体的なことを、ルターはたいへん強力に受け止めていた(たとえば、「トルガウ説教1544年」WA49, 600)。

2. 伝道者の務めの形態

伝道者職がどのような形態をとるかは、その本質に根差して考えなければならない。教会法全体と同様に、職制も神学的な考察の対象である。(地上に存在する以上、教会法も職制も必要ではあるが、本質的、霊的なものではなく、世俗的なものにすぎない、という考えを取らない。)プロテスタント的な教会法は福音の法として、すなわち、福音への応答として形作られる。(聖書を律法として読み、聖書から直接教会法を引き出せる、という考えを取らない。)職制もまた、福音に示された伝道者職の本質を映し出すことを目指さなければならない。それゆえ職制は「しるし」の性格をもつ、という言い方もされる(ルター「ハンス・ヴォルスト反駁」)。以下の三つのことについても、確定的な形があるわけではなく、つねに検討され、改革され続けなければならない。

① 按手礼

按手礼において、召命を受けた者が公に教師の務めに任じられる。その際、聖霊を求める祈りがささげられ、按手が行われる。按手礼は、全体教会が行う公の奉仕である。按手礼が霊的な身分を与えるわけではないが、神の召しが地上の出来事となる聖なる式である。メランヒトンは「アウグスブルク信仰告白弁証」の中で、「按手を聖礼典と呼ぶことをためらわない」と述べた(第13条)。ここには按手の重要性が示されている。大切なことは、按手礼には神の御前での重みがあり、真剣な責任が伴うということである。それゆえ、受按を認めるための「正規の手続き」には厳格な基準がなければならない。福音宣教の土台となる神学的な明晰さ、倫理的な誠実さ、世に対して信仰を言い表す勇気、禁欲的生活、魂のための配慮を行う備えと能力を持っているかどうか問われる。

伝道者となるべき人について、一方では「他のどんな働きもできず、伝道者になることしかできない人」と言われ、他方では反対に「他のありとあらゆる

働きに就くことができる人」とも言われてきた。前者は召命の確かさを求めており、後者は献身が逃げ道であってはならないことを示していると思われる。この両者が今日も言われなければならないと思われるが、とりわけ後者を改めて考えなければならないかもしれない。伝道者職はBerufung（召命）という意味でのBeruf（職業）だが、生活の糧を得るための手段としての職業ではない。また、伝道者であることは、つねに多くの誘惑にさらされている。伝道者は霊的な戦いのための武具を身につけていなければならない（エフェソ6：10～18）。

②使徒的継承

古カトリック教会の成立は、正典の結集、信条の制定、職制の確立によるとされる。聖書正典、信仰告白、職制は有機的に結びついており、三者が具体的に働くことが重要であると考えられるが、中世の教会においてはとりわけ職制が整備され、教職者の教会として形成されていったと見ることができる。教会は使徒的な教会であり、健全な教えは使徒が伝えた教えである。古代に形づくられていった信条は「使徒信条（使徒たちの信条）」と呼ばれるようになった。その際、教会が使徒的であることをどこに見るかということ、中世の教会においては聖職者が使徒的継承にあずかっていることにおいてであった。使徒ペトロが次の司教に接手し、その司教はまた次の司教に接手した。その接手の鎖がつながっていることが、使徒の教え、使徒の信仰を受け継いでいることのしるしであった。

プロテスタント教会は、司教接手による職務の継承を受けてはいないし、教会の使徒性のためにそのことが必要であるとも考えない。むしろ、正典としての聖書が読まれ、説教されること、信仰告白が受け継がれ、告白され続けること、これらのことによって伝道することを通して、わたしたちの教会は使徒的教会であり、さらにはキリストの教会であると言える。しかしここで問いは逆に、それなら教会の使徒性にとって、職制の意味はないのかということである。すでに見たように、わたしたちの教会が職制を持つのは、教会が

地上的、法的存在だからではなく、キリストのご命令による。キリストは御言葉の務めをお立てになった。神の言葉を伝えさせ、神の民を信仰告白に至らせるためである。職制があるのは、教会の使徒性のためでもある。使徒性に仕える者として立てられるためにも、按手礼が恣意的なもの、時代に左右されるもの、この世的なものとなってはならず、聖書と信仰告白にふさわしく保たれ、執り行われなければならない。裏返して言うと、使徒的継承に立ち続けることによって、教会が政治的、文化的、時代的な考えで変質させられてしまうことから守られることにもなる。職制が使徒性を守り、使徒性が職制を守るのである。

③職務の種類と秩序

職務の内容については、教会・教派の間に相違がある。上に引いた御言葉においてすでに、使徒、預言者、教師等の異なる職務の名前が挙げられていた。ローマ・カトリック教会や聖公会は、司教・司祭・助祭（主教・司祭・執事）の三職を持つ。ルーテル教会は、基本的には説教職のみを持ってきた。改革派教会は、説教職と並べて長老も教会の職務と考える。

日本基督教団は、伝道者（教師）を分けて正教師および補教師とする（教規第123条）。補教師は「伝道の准允を受けたもの」（同124条）とされ、また聖礼典の執行を認められていないことからして（同104条）、説教を中心として伝道、牧会、教育に当たりつつ、正教師を目指すものと位置づけられている。すなわち、補教師に固有の務めがあるわけではなく、むしろ教師養成の一つの段階として、補教師の期間が設けられていると考えられる。その場合、では補教師の期間の教育と訓練は、だれがどのように行うのが考えられなければならない。

なお、『日本基督教団 口語式文』には、キリスト教教育主事、役員、教会学校校長ならびに教師の就任式の次第が記されている。教師以外に、信徒の職務もあることは当然である。ただし、キリスト教教育主事と役員については教規に規定があるが（第140条、第98条）、教会学校教師についての規定はない。オ

ルガニストや聖歌隊も教会の職務とみなしうるが、やはり規定はない。信徒の奉仕職の位置づけを整えることは、「全信徒の祭司性」の教会にとって重要であるだけでなく、伝道者（教師）の位置と役割を明確にするためにも意義深いことである。

3. 召命と資質・能力

すでに述べたように、伝道者の務めは、第一には神の召しによる。それと同時に教会の委託にもよる。日本基督教団の教憲が「本教団の教師は、神に召され正規の手続きを経て献身した者とする」（第9条）と述べるとき、伝道者の務めの二重の由来が表現されているのである。それなら、「神の召し」はだれがどのようにして判断するのだろうか。教会が行う「正規の手続き」には何が含まれていなければならないのだろうか。

①内的召命

人が伝道者の務めのことを考えるとき、まず考えなければならないのは、その務めへの神の召しのことである。自分がこの務めにつくことは、神の御心なのか、神が自分をこの務めへと呼んでおられるのかどうかを問う。「内的召命」という言葉が使われるが、カルヴァンはこれを「隠された召命 *arcana vocatio*」と呼んだ（『キリスト教綱要』Ⅳ.3.11）。

アメリカの神学者トーマス・C・オーデンは、内的召命は吟味される必要があり、そのためには古代以来の牧会の知恵が有益だと言う。オーデンはまず、召命感が継続的か一時的かを問う。継続的なものであるなら、さらに自分を批判的に見つめて、この務めにふさわしい知的な能力があるか、祈ることを学んだか、礼拝や聖書などの恵みの手段が自分のライフスタイルに深く根付いたかどうかと問うべきである。そしてさらに、古代以来の牧会者の神学に基づいて、以下のことを問わなければならない¹⁾。

・ 貧しい者、よそ者、病者に仕えるために、どれだけのものを手放す用意が

あるか。必要なら、自分自身の生活を犠牲にする用意があることを、どれくらい深く確かめたか。十字架を負い、この世に対して死ぬことが務めのために必要なことではないか（アンブロシウス、クリュソストモス）。

・他者の痛みに共感する力がどれくらい深い。アガペーが育ち始めているか。これらの賜物が乏しいのであれば、内的召命は確かにならないのではないか（アンブロシウス、大グレゴリウス）。

・信仰共同体を導く能力があるか。キリスト教のメッセージを説得的に、また誠実に伝える方法を学ぶことができるか。霊的な訓練をし続けているか。自分は、信仰共同体が十分に信頼を寄せてくれる人物か。聖書を十分に解き明かす人になれるか。教会の伝統がたくわえている知恵に学ぶ意欲があるか。現代の知的な人々にキリスト教のメッセージを明解に提示できるように、信仰について十分に論じることができるか。教会の権威に対して責任を負い、務めが求めている場所に住み、任職の際の誓約に忠実であることができるか（アンブロシウス）。

このような自己吟味に耐えることができたなら、自分が伝道者となる可能性や賜物について、他の人の考えを聞いてみるようにとオーデンは勧める。

オーデンが明確に示しているのは、「伝道者になりたい」という思いは、自分の思いであって、神の召しではない、ということである。思いを与えてくださったのは神であるかもしれないが、そうでないかもしれない。だから吟味が必要である。そこでオーデンはいくつもの問いを重ねるが、そこでまず問うのは、キリスト者として、またキリストの弟子として生きているか、ということに他ならない。自らキリストの弟子でない者が伝道者になることはあり得ないのである。

しかし、オーデンにおいて、これまた明らかなのは、オーデンが後半で問うているのは、神の召しそのものではなく、自分自身の資質・能力だということである。ここでは、「神は、伝道者の務めに適していない者をお召しになることはない」という考えが前提になっている。それゆえ、資質・能力を問うことで、神の召しを（少なくとも神の召しがないことを）知ることができると考え

るのである。この考えは、神の力と不思議な働きとを不当に小さくしている。この考えに立つなら、結局のところ人を伝道者とするのは、神の召しではなく、その人自身の資質・能力だということになってしまう。また、教会共同体の中で、伝道者となるための資質・能力にもっとも恵まれた人を伝道者として立てたらよいということになりかねない。

神の召しは、まず神の召しそのものとして問わなければならない。しかし、神に召されているとはどういうことだろうか。自分に与えられた召しは確かだと言えるのだろうか。それは本当に神ご自身の召しなのだろうか。心に働きかけているのは、ほんとうは人間的な願いや使命感や才能なのではないだろうか。

ドイツの神学者ローベルト・ロイエンベルガーは、召命が神の秘義に属することを認めつつ、それでも聖書の中に、神に召され、どうしても逃げることができずに神に与えられた務めに就くことになった人々の証しが多く見られることを指摘する。モーセ、サムエル、イザヤ、エレミヤ、パウロなどである。また、「献身の証し」として語れるようなことが必要なわけでもない。神の召しを受けるとき、何か特別な体験や経緯を伴うものだと考えるとしたら、それは敬虔主義の影響から生まれてきた誤解だとロイエンベルガーは指摘する²⁾。

ロイエンベルガーは、牧師職の世俗化に対抗したという点で敬虔主義の主張に教会史的な意味があったことを認めつつ、召命が純粹に内的な体験とされ、心理学化してしまったのは行き過ぎであったと考える。聖書においては、神の召しはいつでも神の呼びかけである。人間の内面にも働きかけるにせよ、人間の外から、お働きくださる神の *extra nos* から来る。神はさまざまな仕方でお働きになるが、突き詰めれば、神の呼びかけとは神の言葉である。自分の命に対する神の言葉を聞く。しかも、それが何を意味しているかがすぐにわかるわけではない。献身の初めからそれを捉えていることはごくまれであり、むしろ、伝道者としての道が続けていく中で、ようやく捉えられてくるのである³⁾。神の言葉を聞き続け、自分にとってのその意味を問い続ける。今まで思

い違いをしていたと気づかされ、悔い改めさせられることもしばしばである。信仰者の全生涯が悔い改めであるのなら、神の召しを受け取り、献身することも、全生涯にわたって継続していくのである。

②ふさわしくない者の献身

トーマス・C・オーデンが内的召命を問う時にも資質・能力の吟味を求めたのに対して、ローバート・ロイエンベルガーはただ神の呼びかけだけを問題にした。それは、資質・能力を「問わない」ということでもある。聖書に登場する召された者たちは、むしろ必要な資質・能力を欠いていた。モーセは「舌の重い者」だったし（出エジプト4：10）、人を殺して逃亡した者だった。イザヤは「汚れた唇の者」だった（イザヤ6：5）。パウロは「実際に会ってみると弱々しい人で、話もつまらない」人だった（Ⅱコリント10：10）。しかも、教会を迫害したのであって、自分のことを「月足らずで生まれたようなわたし」と言い（Ⅰコリント15：8）、「罪人の中で最たる者」と言わずにはいられなかった（Ⅰテモテ1：15）。パウロはコリントのキリスト者について「世の無学な者」、「世の無力な者」と言ったが（Ⅰコリント1：26～29）、これは伝道者にはなおさら当てはまることであるに違いない。

実際、教会の中にはしばしば、牧師よりも雄弁な者、教えるのが巧みな者、人間や世の中をよく知っている者、組織を作ったり管理したりするのがうまい者がいる。ギリシア語やヘブライ語の知識があり、聖書の注解書を読んでいる者さえいるかもしれない。そして、それでかまわない。伝道者の務めを果たすのに役立つ賜物を持っていることが、その人を伝道者にするわけではないのである。子どもから悪霊を追い出すために必要なのは、「からし種一粒ほどの信仰」だけだった（マタイ17：20）。ふさわしくない者が、ただ神に召されたゆえに献身する。神はその人を伝道者にすることがおできになり、ご自分の御用のために用いることがおできになる。召された者に必要なのは、神に信頼し、お従いすることだけである。

③外的召命

伝道者の務めへの召命は、神が召してくださっていることを個人的、内的に受け取るだけでなく、教会によって確認されなければならない。それを行うのは個人ではなく教会であり、個教会ではなく全体教会である。それは、使徒的な伝統の中で伝道者が立てられるためである。

教師検定委員はもとより人間であり、知識や理解が限られ、社会的な前提や先入観を持ち、その時代の価値観の影響を受けている。委員各自の個性もある。誤りのあり得る人間が、聖霊の導きを願い、神の御心を求め、祈りつつ教師検定を行う。委員はきわめて困難な働きを担うことになる。

トーマス・C・オーデンは、外的召命についても、古代以来の牧会者の神学に助けられて、いくつかの基準を立てることができると考える⁴⁾。

・伝統によれば、志願者は定められた年齢に達していなければならない。古代においては30歳であった。ローマ・カトリック教会では25歳となった（「カトリック新教会法典」第1031条）。ある伝統では21歳である。近代では必要な神学教育を受けていればよいとする傾向にある。

・志願者は自分の召命感と取り組み、伝道者の務めに就くことが神に応答する最善の道であると確信していなければならない。

・志願者は務めを果たすための個人的な賜物を持っていなければならない。そこには、現実的な自己理解、他者と共に忍耐強く働く能力、愛、憐れみ、他者への尊敬が含まれる。

・志願者は健康でなければならない。志願者は、務めを果たすことをはなはだしく妨げかねない短所をそれなりに免れていなければならない。

・志願者がよい人柄を持っていることが、志願者をもっともよく知る人々によって確かめられなければならない。

・志願者は聖書と伝統に責任を負いつつ、キリスト教の教理を説教し教える能力を持っていなければならない。

オーデンが提示するのはここでも、伝道者となるための資質・能力であり、さらにその人の人物（性格や人柄）である。オーデンがこれらのことを挙げる

のは、指導力のなさ、間違っただけを語る教師、悪い牧師などから、教会共同体を守るために他ならない。そのような伝道者が判断を誤ったり、さらには悪いことを行ったりすることによって、群れに害が及ぶことがあるからである。

オーデンにおいては、内的召命を吟味する際に、神の召しそのものを問うことが不十分で、伝道者の務めを果たすための資質・能力について自己吟味することに置き換わってしまっていた。そのため、外的召命を確かめることも、志願者の資質・能力を、今度は教会が吟味することにとどまっている。しかし、神の召しそのものを重んじるなら、外的召命において問うべきことは、志願者の召命感と共に、志願者がどのように召命に応答し、献身してきたか、また献身しているかであるはずである。神が自分を召してくださっていることを覚え、その召しに応答したいと願うならば、そのために自分をささげ、召された務めにできるだけよく備えるための具体的な準備に取り組むことになる。ディートリヒ・レスラーはオーデンよりもていねいな言い方をする。

「説教職に対する志願者の内的召命は、この務めと結びついた任務および仕事への願いと努力があるかどうか、そしてさらには、そのために必要な個人的で無理のない形での備えがあるかどうかで示されることになる。これらを通して『内的召命』は外的に明らかに見分けられるようになる」⁵⁾。

献身が具体的な行為や生き方になって現れていないとしたら、ほんとうに神の召しを受け取っているのかが疑われることになる。しかし、神の召しを受け取ったならば、献身が引き起こされる。資質・能力をできる限り向上させようと努める。第一に召命、次に献身という順序があることは明らかである。それなら、資質・能力については、それを向上させようという意欲さえあればいいのか。求められる一定の基準があるのか。ここでも、資質・能力の吟味をどこに位置づけるかが課題である。

4. 職務と人格

伝道者の務めは、何よりも神の召しから来る。神の召しは神の言葉、神の語

りかけによって与えられる。それゆえ、神との交わりのうちにとどまること、神の語りかけを聞き続けること、神の御心をより深く受け取り直し続けることが大切である。問うべきなのは、「あの時与えられた召しは本物だったのか」ではなく、「神は今わたしに何を望んでおられるのか。わたしはそれにどう答えているか」である。

召命は個人のものにとどまらず、教会のものとなる。伝道者になることを志す者のために教会は祈り、教会生活を通して訓練する。また神学教育を受けさせる。そして、按手に向けて教師検定を行うことになる。そこで問われるのは、志願者の召命感であり、人格であり、伝道者として奉仕するための資質・能力である。それなら、志願者自身が追い求め、教会が吟味すべき、伝道者の人格と資質・能力とはどのようなものなのだろうか。

伝道者論は伝統的に「職務 office (英)、Amt (独)」と「人格 person (英)、Person (独)」の二つの側面から考えられてきた。プロテスタント教会は叙階の秘跡を認めず、伝道者に霊的な身分や状態があるとは考えないので、伝道者もそれ以外の信徒と変わることはない信仰者であり、ただ教会から職務をゆだねられているだけだとして、職務から(のみ)伝道者について考察することが多かった。

①伝道者の「職務」

プロテスタント教会は伝道者を「御言葉と聖礼典の奉仕者」とし、その務めを突き詰めれば「御言葉の務め、説教職」であるとしてきた。それに対して、現代においては、伝道者の務めをより多様に考えるようになってきた。たとえば、ドイツの神学者ゲルト・オットーは、「説教、礼拝、牧会、キリスト教教育」という実践神学の伝統的な領域を解体し、伝道者と教会の働きを「学ぶ、助ける、知らせる、語り書く、解釈する、祝う、協力する」こととして考えた⁶⁾。あるいは、アメリカの神学者ウィリアム・ウィリモンは牧師を「祭司、聖書解釈者、説教者、カウンセラー、教師、伝道者、預言者、リーダー、人格者、訓練されたキリスト者」として捉えた⁷⁾。しかしここでは、現代社会が求

める伝道者像や、現代の実践神学が提起する伝道者像に深入りせず、ディートリヒ・レスラーの整理に従って、その概要を見ることにする。レスラーは19世紀以降の伝道者像を四つのタイプに分けている⁸⁾。

第一は、宗教改革的な伝道者像である。「牧師とは、特別に神学的訓練を受けた教会のメンバーであって、神の言葉を具体的な教会共同体において、説教、牧会、教育、証しを通して伝える使命を持っている。牧師はまた、他の奉仕者たちと協力して教会形成にあたる。その限りにおいて指導的な働きも引き受ける」(ヴィンクラー、クレッチマー)。

第二は、教会の働きについての機能論から出てくる伝道者像である。伝道者が果たすべき基本的な機能は、社会と文化の中で「キリスト教的な価値を伝達すること」と、危機的な状況において「援助しながら同伴すること」にある(K. W. ダーム)。

第三は、心理学と牧会運動から出てくる伝道者像である。伝道者は社会の中で「聖職者」とみなされ、人知を超えたものを代表している。秘義への参与を可能にする祭司であり、預言者であり、危機的状況における助言者である。そのようにして社会に宗教性をもたらす。

第四は、政治的観点から捉えた伝道者像である。伝道者は同時代の出来事にかかわり、現代の社会や政治が十分に対応することができないことに対してキリスト教の立場から発言し、行動する。

最初の宗教改革的な伝道者像とそれ以外の三つの伝道者像の違いは、それぞれの伝道者像の由来にある。すなわち、宗教改革的な伝道者像が聖書と神学に由来しているのに対して、他の三つの伝道者像は、社会の期待、時代の要請、伝道者自身の希望から生まれている。伝道者の務めは何か、わたしは伝道者として何をなすべきか、という問いに対して、わたしたちの場合も、まったく曖昧にしか考えていないことも多い。一方では、それが「伝統的である」という思い込みから、吟味することなしに、昨日までしてきたことを今日もしているかもしれない。他方では、やりがいや手応えを求めて、新しい活動に乗り出してしまふかもしれない。伝道者の職務は、「そもそも自分は神から何に召され

ているのか」を問うことによって考えなければならないのである。

②伝道者の「人格」

プロテスタントの伝道者論は、長く職務や機能を問うことに集中していたが、教会や伝道者の存在とその意義が当たり前でなくなるとともに、伝道者とは何者であるのかが問い直されるようになった。伝道者の使命は社会において「有益である」こととされ、その有益さは、伝道者の働きよりも人格に見出されるようになった。伝道者とは、信仰をもって生きることの見本だということである。こうして、伝道者論における関心が職務から人格に移動してきた。

また、伝道者としての資質・能力は、もともとは伝道者に求められる職務を果たすための力のことであって、職務と結びついていたもののだが、伝道者の人格が問われるようになると、むしろ伝道者の人格を形作る要素の一つとして、その人の資質・能力を考えるようになった。「神学的能力」という言い方が生まれ（たとえばアイラート・ヘルムス）⁹⁾、神学教育はこの神学的能力を養うために整備されるべきだという主張がなされた。

「資質・能力 competence（英）、Kompetenz（独）」は、（ヘルムスも述べているとおり）チョムスキーの生成文法論に由来する。competenceとは、母国語を使う場合のように、自由に文を生み出した理解することができる言語能力であり、performanceとは、この能力を用いて実際に話したり聞いたりする言語運用である。この概念を援用して、神学の事柄を自家薬籠中のものとすることができることを神学的能力 competence と言い、それを発揮して実際に伝道者の働きに当たることを神学的実行 performance と呼んだ。このような意味での神学的資質・能力は何かを問い、それを身につけることを求めたのである。

オーデンの召命論には、ability、competentなどの語が頻出する。オーデンは伝道者となることを志す人が献身以前から competent であることを求めたのに対して、ヘルムスは志願者が受ける神学教育が資質・能力を養成するものであることを求めた。そのように捉え方の違いがあるとはいえ、いずれの場合

も、伝道者論を展開するにあたって人格に注目し、とくに資質・能力を問題にしているという点では共通している。

③職務と人格の結合

わたしたちの課題は、伝道者の職務を神の召しにおいて受け取り直すとともに、伝道者の人格、とくに伝道者としての資質・能力を正しく位置づけることである。伝道者の職務と人格とは、明らかに結びついている。伝道者は職務の理解をはじめ、信仰の事柄を、それぞれ自分の人格において個人的な形で自分のものにするしかないのだし、職務の遂行のために信仰の事柄を伝える際にも、人格的なかわりを通してするしかないからである。しかし、職務と人格の関係は、20世紀の牧会者の神学においても、さまざまに考えられてきた。

神の言葉の神学は伝道者を「証人」とみなすが、その際人格は使命の背後に完全に後退してしまう。人格的に語ること（雄弁に語ったり、経験を語ったりすること）は神の言葉への奉仕にはならない。神の言葉は人間的な努力とはまったくかわらない現実なのであって、「いかに語るか」という問いは（これが19世紀の実践神学の課題だったが）、何の役割も持たない¹⁰⁾。

これに対し、「人間を軽視し、悩める魂を本当には助けていない」との批判がなされるようになり、実践神学において人間の経験を重視することへの方向転換が起きた（empirical turn / empirische Wendeと言われる）。牧会心理学はむしろ、キリスト教的なコミュニケーションにおける人格の重要性を強調した。「人格が職務を担う」のである（クラウス・ヴィンクラー）。

これに対し、伝道者の務めを「専門職」と考える立場から異論が唱えられた。牧会心理学は人格を重視しすぎ、また神学を軽視しすぎている。伝道者は確かに、人格的な仕方でもキリスト教信仰を代表している。ただしその際、人格だけでなく、教会から職務を委ねられていることも、神学教育を受けたことも、共に働いている。人格は重要だが、それは、伝道者が立派な人格を持っていることで信頼性や権威を持つといったことではない。むしろ、委ねられている事柄について、人格的な側面まで含めて専門家として働きを担えるというこ

とである¹¹⁾。

この考え方を受け継ぎつつ、伝道者の人格の意味を捉え直す試みも行われている。信仰のコミュニケーションの中で、福音が具体的に働くようにしようとするとき、伝道者がそこにいること、信頼される存在であることが重要になる。ただし、伝道者が人格的にそこにいることも、信頼される存在であることも、直接伝道者自身の人格に基づくのではなく、伝道者の職務がもたらす人格性によると考えるのである（ミヒヤエル・マイヤー＝ブランク）。

伝道者は奉仕者であり、神の言葉の神学が言うとおりに「証人」である。しかし証人は証言にあたって、消えるわけにはいかない。むしろその出来事に人格的に巻き込まれてしまった当事者であるからこそ証言することができる。そもそも伝道者はその職務の遂行にあたって、姿かたちを持ち、声を持ち、個性を持った者として、そこにいるのであって、消えることなど初めからできはしない。そうしたことからしても、伝道者の人格を問うことは避けられない。

他方、神の言葉の神学は、伝道者の働きは人間がする働きに過ぎず、神の働きではないことを真剣に受け取らせてくれる点で、まことに正しく、重要である。人格を問うことは、伝道者論における第一に問いではありえないのである。そこで、最近の議論が示しているように、職務と人格がどのように結びついているのか、職務の中で人格が、そして資質・能力がどのような意味を持つのか問われることになる。

5. 福音の担い手

①キリストの職務と伝道者の職務

伝道者の職務は何であるかを改めて考えたい。主イエスが十二人を派遣したのは、「神の国を宣べ伝え、病人をいやすため」であったが（ルカ9：2）、神の国を宣べ伝え、病人をいやすことは主イエスのお働きそのものである。ここに、主イエスに遣わされる弟子の務めは主イエスの務めと同じであることを見

て取ることができる。さらに、主イエスの昇天後、聖霊降臨によって誕生した教会は、「キリストの体」であり（Iコリント12：27）、この体で主イエスご自身がお働きになる。「教会として存在するキリスト」（ボンヘッファー）である。そこで、キリストの職務が、教会の職務であり、伝道者の職務なのだと考えることができる。それは、伝道者がキリストの後継者となるとか、キリストを模範として働くとかいったことではなく、キリストご自身がお働きになるための道具として、キリストのために奉仕するという意味においてである。

*王の務め

メシア（油注がれた者）は、旧約聖書では王であり、祭司であり、預言者である。ここからキリストの三重の職務について語られてきた。イエス・キリストは真の王である。主イエスは誕生した時に「お生まれになったユダヤ人の王」（マタイ2：2）と呼ばれた。ゼカリヤが預言した柔和な王としてエルサレムに入城された（同21：4～7）。総督ピラトが主イエスを尋問するにあたって問うたのは「お前がユダヤ人の王なのか」という問いであり（同27：11）、主イエスは総督の兵士たちからは「ユダヤ人の王、万歳」と言って嘲られた（同27：29）。主イエスがかけられた十字架の上の罪状書きには「これはユダヤ人の王イエスである」と書かれていた（同27：37）。マタイによる福音書の記述をたどってきたが、ヨハネによる福音書においては十字架に上げられることが王座に就くこととして語られていると読むこともできる。

主イエスが王であられることは、恵みの支配をもたらす支配者であり、罪と死に打ち勝ってくださった勝利者であることでもある。王であるからこそ十字架にかかり、王であるからこそ十字架から降りないで、救いを完成してくださった。しかしここでは、イスラエルの王が羊飼いであることに注目したい。エゼキエル書34章で王は「牧者」と呼ばれ、その務めは群れを養うことだと言われる。ところがイスラエルの牧者たちは自分自身を養うばかりであった。そこで神はご自身が羊飼いの働きをされると言われる。

神ご自身が王であり、羊飼いであることは旧約聖書が繰り返して語るところ

である。主イエスはその全体を引き受けてお語りになる。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネ10:11)。同じヨハネによる福音書において、甦られた主イエスはペトロに三度「あなたはわたしを愛しているか」と問われ、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることはあなたがご存じです」とペトロが答えるたびに「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた(同21:15~17)。飼うのは、自分の羊ではなく、主イエスがご自分の血をもって贖い取ってくださった主イエスの羊である。しかし、ペトロがその世話をするのである。そして、主イエスの羊を飼うようにとの委託を受けたそのペトロが、次の世代の伝道者たちに同じ務めを手渡す(Ⅰペトロ5:2)。その際、上に立って支配するのではなく、同じ羊として共にあり、先頭に立って導くのである(同5:4)。

* 祭司の務め

ヘブライ人への手紙は大祭司キリスト論を展開する。主イエスは「もろもろの天を通過された偉大な大祭司」であり(4:14)、「天そのものに入り」(9:24)、ご自身をいけにえとして献げて罪を取り去ってくださった(9:26)。

王の務めにおいても、伝道者は、王としての働きのうち、「永遠の契約の血による羊の大牧者」(13:20)である主イエスの牧会のわざにささやかに奉仕するだけであったように、祭司の務めにおいても、本来の務めはすでに終わっている。主イエスが「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」のであり(9:12)、「唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさった」からである(10:14)。伝道者は祭司として仕えるが、もはやいけにえを献げるわけではない。ただ賛美と祈りを献げる。礼拝をお献げするのである。救いのみわざはすでに成し遂げられているので、わたしたちは感謝をもって賛美する(13:15)。

* 預言者の務め

主イエスは教師、ラビと呼ばれるとともに、預言者だと見られていた。人々

は主イエスのことを何者かと考え、エリヤだとか預言者の一人だとか言っていた（マルコ8：28）。サマリアの女（ヨハネ4：19）、五千人の給食を見た人々（同6：14）、シロアムの池で目が見えるようにされた人（同9：17）は主イエスを預言者だと呼び、主イエスもそれを否定なさない。それどころか、ご自分を指して、「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と言い（ルカ4：24）、また「預言者がエルサレム以外のところで死ぬことは、ありえない」と言われた（同13：34）。ユダヤの最高法院の人々は、主イエスに目隠しをした上でこぶしで殴りつけ、「言い当ててみる（直訳すれば「預言せよ」）」と言った（マルコ14：65）。

主イエスは神の言葉を語り（ルカ5：1）、神の福音を宣べ伝え（マルコ1：14）、神を示したのだから（ヨハネ1：18）、当然預言者だと言えるし、さらには預言者以上のお方である。主イエスご自身が、預言者たちが語ったことの実現であり、神の言葉そのものだからである。甦られた主イエスは弟子たちに、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」とお命じになった（マルコ16：15）。主イエスの言葉の働きについて使われていた「宣べ伝える（ケーリュツソー）」という言葉がそのまま弟子たちの働きのために用いられる。実際、「宣べ伝える」という言葉は、福音書だけでなく使徒書においても多く使われ、その目的語は主イエスの場合と同様に「神の国」であるとともに、「イエス・キリスト」でもある。主イエスの告げた神の国は主イエスにおいて到来しているからである。伝道者は主イエスの預言、主イエスの説教を継続する。今日の前にいる人々が、主イエスにおける神のご支配にあずかるようにまでならせるのである¹²⁾。

②伝道者の霊性

*わたしたちの課題

キリストの三重の職務に導かれて、キリストの僕、キリストの奉仕者としての伝道者の職務を確かめてきた。伝道者には、王として牧会の務め、祭司として礼拝の務め、預言者として説教の務めが与えられている。このことと、これ

まで繰り返し問うてきた、伝道者の人格、そして資質・能力はどのようにかわるだろうか。

託される務めに応えるために、伝道者になることを志す者は教会生活を深めるとともに神学教育を受ける。教会生活で経験することは、牧会されること、祈られること、説教を聞くことである。それらのことを通して、イエス・キリストご自身の働きにあずかる。自らが魂を取り扱われ、祈られ、神の語りかけを聞く経験をすることなしに、伝道者の務めに当たることはできない。教会生活において重要なのは、奉仕をすることでもなければ、教育や訓練を受けることでもなく、生きておられる主イエスと出会い、主イエスとの交わりを深められ、主イエスによって回心させられ、新しくされることである。

では、神学教育においては何がなされているのだろうか。神学の知識を習得し、自ら「神学する *doing theology* (英)、*Theologie treiben* (独)」ことを学ぶ。そうやって身につけた力を総動員して、とりわけ説教をしようとする。仕事をこなすようにして安易に説教をこしらえるようなことにならないように、神学的な課題として取り組まれているとはいえ、ここでは結局、人間の資質・能力 *competence* を土台にして、力量のある説教者 *competent preacher* になろうとしている。神学校は「よい」説教者を育てたいし、神学生は「よい」説教者になりたいのである。ここに誘惑があり、危険があるように思われる。わたしたちは神の召命を重んじてはいるものの、それが職務の遂行、説教の奉仕にまで十分に結びついていないように思われる。職務と人格が分かれてしまっていて、人格を置き去りにしたまま務めを果たそうとしたり、神に託された務めとしてではなく人間のわざとして働いてしまったりしているのではないだろうか。

上に三重の職務を取り上げ、伝道者においてはとくに牧会、礼拝、説教であることを見た。しかしこれは、伝道者が主にこれらの三種類の働きに従事するということを意味してはいない。キリストについても、「一つにして全体的な関連の中にある活動を、三重の職務はそれぞれの角度から豊かに理解することに努める」のであって、キリストのお働きを三つに分解し、それによって小さ

くしてしまうといったことではない¹³⁾。伝道者についても、主な働きが三つある、という捉え方をしたのでは、伝道者の姿をかえて見誤ることになる。

伝道者は牧会することと祈ることにおいては、自分の人格を傾けて行う。まさに「人格が職務を担う」ことになる。そして自分の人間性によって職務を行おうとし、働かれるのは主イエスご自身であることを見失う。他方、説教することにおいては、自分の資質・能力を傾けて行う。神学教育と結びついた力なので、主イエスを見失うまいとする意識は働くのだが、自分の人格は置き去りにされてしまい、言葉が上滑りしてしまう。

*** 預言者アモスの姿から① 資質・能力そのものの変容**

預言者アモスの言葉から二つのことを聞き取りたい。アモスは「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない」と言う（アモス7：14）。アモスは神学校を出なかった。あるいは、たとえ神学校を出たとしても、だから伝道者であるわけではないという。アモスが預言者として活動している根拠は、神学校を出たことでなく、教師検定試験に合格したことでもない。ただ、主が「行って、わが民イスラエルに預言せよ」とお命じになったことだった（同15節）。つまり召命がすべてだった。まずそう言える。

しかし、わたしたちが考えてきたことと照らし合わせれば、それでもアモスは何らかの形で預言者教育を受け、資質・能力を伸ばすことをしただろうとも想像できる。そうであってなお、アモスは自分を預言者と呼ばず、「家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者」だと言う。アモスだけにしかない歴史があり、経験があり、そこから生まれる言葉がある。わたしたちが目指したいことの一つは、神学教育で受け取ったことの一つ一つが、自分自身の考えや経験、さらには自分の感情や心の傷と触れ合い、わたしたちの魂を深いところまで照らすようになり、実存的に受け取り直されていくことである。「4」の③で見た「職務と人格の結合」はそこまで行かなければ実を結ばないのではないか。

*** 預言者アモスの言葉から② 執り成しの祈りと預言**

「執り成しの祈り」と言えば、上記の三重の職務で言えば、牧会の事柄であり、祈りの事柄であると考えられる。しかし、アモス書7章における執り成しの祈りは、預言者としての働きに直結している。アモス書7章以下の五つの幻は、アモスの召命体験ではないとも言われる。そうだとすると、「わたしは預言者ではない」と語るアモスが、それでも預言者として立てられることになった経緯でもあることになる。

神がアモスに幻をお示しになる。幻を通して御心を示される。アモスは神の御心を受け取り、それを人々に告げなければならない。幻を示されることが、「行って、わが民イスラエルに預言せよ」との命令でもある。しかし、アモスはすぐに口を開かない。説教を始めない。むしろ祈りだす。執り成しの祈りをする。「主なる神よ、どうぞ赦してください」(2、5節)。ここでアモスは牧会者として苦しみうめき、祭司として祈る。その積み重ねの果てに、ついに民に向かって口を開くことになった。

アモスは災いの言葉を語ったので反対に遭い、追放されそうになった。その時アモスは、自分は預言者だから語っているのではなく、神に命じられたから語っているのだと言った。しかしそれは、自分には神の召しがあるのだからと胸を張っているのではなかった。神の言葉の前で、自分自身がいちばん恐れおののき、叫び声をあげ、執り成しの祈りを重ね、それでも神の言葉が迫り、燃え上がり、語らないわけにはいかなかった。そういう思いを語ってる。エレミヤの告白も、同様の経験を語っているのではないだろうか(エレミヤ20:9)。

わたしたちが目指したいことのもう一つは、神学教育で受け取ったことと同様に、神の言葉をも自分の実存の深みにおいて受け取ることである。神の言葉によってわたしたち自身が回心させられ、造り変えられることである。神の裁きのもとに立ち、苦しみうめき、執り成しの祈りを献げることである。その地点から語りだすことである。羊のために祈り続ける羊飼いとして説教する。そういう伝道者でありたい。

*ローマ・カトリック教会の司祭養成から

2016年、ローマ・カトリック教会の教皇庁聖職者省は「司祭召命の賜物」を公布した¹⁴⁾。そこでは、司祭養成にあたって、人間的次元、霊的次元、知的次元、司牧的次元の四つの次元が総合されなければならないことが指摘されている。また、養成の基礎として内面的生活が養われていく必要が語られ、そのための手段として「個人的な同伴」と「共同体的な同伴」が挙げられている。「霊的同伴 *spiritual direction*」は今日プロテスタント教会においてもその必要が意識され始めている。伝道者が生涯にわたって同伴を受けつつ歩むことは重要なことである。

〔参考文献〕

注に挙げた文献以外に、以下のものを参照した。

- ・ Abfred Dedo Müller, *Grundriss der Praktischen Theologie*. Gütersloh 1950.
- ・ Birgit Weyel, *Pfarrberuf*. in: Wilhelm Gräß u.A.(Hg.), *Handbuch Praktische Theologie*. Gütersloh 2007.
- ・ Michael Meyer-Blanck u.A., *Studien- und Arbeitsbuch Praktische Theologie*. Göttingen 2008.
- ・ Kristian Fechtner u.A., *Praktische Theologie: Ein Lehrbuch*. Stuttgart 2017.

(こいずみ・けん)

注

- 1) Thomas C. Oden, *Pastoral Theology: Essentials of Ministry*. HarperCollins 1983, pp. 18-20.
- 2) Robert Leuenberger, *Berufung und Dienst: Beitrag zu einer Theologie des evangelischen Pfarrerberufes*. Zürich 1966, S. 16.

- 3) *ibid.*, S. 19.
- 4) Oden, *op.cit.*, pp. 20-22.
- 5) Dietrich Rössler, *Grundriß der Praktischen Theologie*. Berlin / New York ²1994, S. 123.
- 6) Vgl. Gert Otto, *Handlungsfelder der Praktischen Theologie*. München 1988.
- 7) cf. William H. Willimon, *Pastor: the Theology and Practice of Ordained Ministry*. Abingdon Press 2002. (越川弘英、坂本清音訳『牧師——その神学と実践』新教出版社、2007年)
- 8) Dietrich Rössler, *Grundprobleme der Praktischen Theologie*. in: Friedrich Wintzer u.A., *Praktische Theologie*. Neukirchen-Vluyn ⁵1997, S. 17-19.
- 9) Vgl. Eilert Herms, Was heißt „theologische Kompetenz“?. in: ders., *Theorie für die Praxis – Beiträge zur Theologie*. 1982 München, S. 35-49.
- 10) Vgl. Eduard Thurneysen, *Die Aufgabe der Predigt* (1921). in: ders., *Das Wort Gottes und die Kirche – Aufsätze und Vorträge*. München 1971, S. 95-106. [E. トウルナイゼン、加藤常昭訳「説教の課題 I」(K. バルト、E. トウルナイゼン『神の言葉の神学の説教学』日本基督教団出版局、1988年、185～205頁)。]
- 11) Vgl. Isolde Karle, *Pfarrberuf als Profession*. Stuttgart ³2011.
- 12) Hans Joachim Iwand, *Homiletik-Vorlesung* (1937). in: ders., *Predigten und Predigtlehre* (Nachgelassene Werk. Neue Folge Bd. 5). Gütersloh 2004, S. 428. (ハンス・ヨアヒム・イーヴァント、加藤常昭訳『説教学講義 (イーヴァント著作選1)』新教出版社、2009年、23頁。)
- 13) 近藤勝彦『キリスト教教義学上』教文館、2021年、1139頁。
- 14) 教皇庁 聖職者省『司祭召命のたまもの——司祭養成基本綱要』カトリック中央協議会、2022年。